

保護者と担任の信頼関係

松浦 純子

来週から担任、生徒、保護者の三者面談が始まる。私は生徒として三者面談の経験がなかったので、担任として初めて面談することになった時は、周りの教員が余りにも入念に準備をしていたので驚き焦った。やりすぎではないかと思っただくらいだ。しかし、保護者と担任、生徒と担任のコミュニケーションは大切で、これを怠るとつげは生徒に回ってくる。

保護者に安心して学校に生徒を預けてもらうために、担任の業務は毎朝の生徒の出席状況のチェックから始まる。生徒が連絡なく登校していない時は、すぐに家庭に電話をかけて状況を聞く。ほとんどの場合は保護者が学校に連絡するのを忘れたことで済んでいる。私が勤め始めた時に既にこのように対応していたので、かなり前から続いている習慣だろう。これも初めはここまでやるのかと思ったが、昨今はこの必要性を感じさせる事件が続いている。

さて、三者面談に話を戻すと、私が担任をしていた時は、「お母さんは家で、子供さんに『勉強、勉強』と言わなくて結構です。必要なら私から言います。その代わりに、私は子供さんの食事の面倒までは見られませんので、お母さんは家で毎日おいしい食事を作って、健康にだけ気を付けてあげてください。何かありましたら、こちらから連絡します。ぜひ一緒に協力していきましょう」と言ってきました。ほとんどの保護者は、おいしい食事、健康ということばに納得し、協力してくれました。

私は保護者と話すのが好きだ。だから、保護者もそれを感じてくれるのか、「ここまで話してくれていいのかな」ということまで話してくれた。ここ十年間くらいは担任をしていなかったもので、話す楽しみはなくなった。各家庭は千差万別で、外から見えないこともたくさんある。私が話を聞いたから問題が解決するわけではないが、担任を信頼してくれるのがうれしかった。

若い教員にとって保護者は親世代の場合もある。年上と話すのが嫌で、教員という仕事を避ける人もいるのかなと思う。人と話すのは楽しいのに。